かかみがはら
百科+PLUS
Kakamigahara Encyclopedia

スマートミュージアム Kakamigahara

かかみがはら百科プラス 2024 No. 08

令和6年度 各務原市歴史民俗資料館
関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム

慶長五年八月の美濃

「四戦図屏風」（岐阜市歴史博物館画像提供、部分、一部改変）

関ヶ原合戦への道程

慶長3年（一五九八）8月、本能寺の変から僅か16年、京都伏見城で、豊臣秀吉が没しました。「つゆとをち つゆときえにし わかみかな なにわの事も ゆめの又ゆめ」、辞世の和歌のごとくの生涯でした。

秀吉没後、秀吉子飼いの奉行衆による政権運営は、嫡子秀頼への権力継承を目指しました。それを支える基盤として、全国の有力大名は年寄として位置付けられました。中でも徳川家康は関東に250万石の領地をもつ存在で、それに次ぐ中国地方の毛利輝元、会津の上杉景勝の120万石と比べても傑出した存在でした。奉行衆は家康による婚姻政策などを法令違反として糾弾しましたが、家康を支持する勢力も多く、一枚岩であったはずの豊臣系大名衆は敵対の度を増していきました。そんな中、慶長4年、会津に帰国した上杉景勝が城や道路の普請などを大規模に進めた結果、家康は釈明のための上洛を要求しました。しかし景勝は要求を拒否したため、翌5年6月、徳川家康を主将とする上杉討伐の出陣命令が発せられました。

家康が上杉攻めのため東に下ると、その間隙を縫うかたちで、近江佐和山に引退していた石田三成らが、増田長盛、長束正家らの奉行衆や毛利輝元、宇喜多秀家ら年寄衆の一部と謀り、家康との対決姿勢を鮮明にしました。毛利輝元は7月15日、広島城を出発、遅くとも19日には「西軍」の盟主として大坂城西の丸に入り、上方での徳川方の拠点伏見城攻めが開始されました。7月24日、下野小山で上方での蜂起の報に接した家康は、諸将との軍議に臨み、これを討つことを決定しました。家康は諸隊を二つに分け、徳川秀忠を中心とする中山道軍、福島正則・池田輝政を主将とする東海道軍を編成し、それぞれ西上させました。こうした中、東西の軍勢が激突する地として美濃がクローズアップされます。

慶長5年、美濃平野では、関ヶ原合戦直前のおよそ1ヶ月の間、8月16日福束城の戦い、22日米野・新加納の戦い、竹ケ鼻城の戦い、23日岐阜城の戦い、河渡の戦い、9月14日杭瀬川の戦いと断続的に合戦が行われ、15日の関ヶ原合戦でクライマックスを迎えることとなります。この間、岐阜城主織田秀信が西軍に付いたため、美濃の諸将の大半は西軍に味方し、美濃平野での合戦が広範囲に展開しました（図1）。

また近年、次のようなことが分かってきています。

・東海道軍の先鋒として福島正則と池田輝政、軍目付として井伊直政と本多忠勝が派遣されたが、諸将の西進には時間差があった

・諸将の人質は、輝政の居城三河吉田城に置かれていた

こうした事実から、「小山評定」の結果、徳川家康の下、豊臣系の諸将が一枚岩となって東海道を西へ向かったとするのは、江戸幕府成立の序章として出来すぎた物語といえます。

慶長5年8月中旬までの段階では、家康をはじめとする東軍の諸将にとっては、事態の推移について疑心暗鬼の状態が続いていました。なかでも福島正則は豊臣政権を支えた股肱の臣として、豊臣秀次に代わって尾張を任されており、その動静は注視される存在でした。

図1　美濃平野合戦（慶長5年8月～9月）（関ケ原町歴史民俗学習館提供の図を修正）

資料1　清須城で軍議を開く諸将（小野市立好古館所蔵「関ヶ原合戦絵巻」）

二度開かれた清須軍議

8月19日、福島正則の居城清須城に、東軍先遣隊諸将と家康からの使者村越直吉が集まり、軍議が行われ、家康本隊の到着を待たず、東軍先鋒隊のみでの岐阜城攻撃が決定します（2ページ・資料1）。村越からこの報告を受けた家康は、即刻伊達政宗に書状を送るなかで、「彼表左衛門大夫（注・福島正則）丈夫御座候」と記しており、この軍議の結果からようやく福島の意思が揺らがないという確信を得たことが分かります。

ちなみに、19日の軍議には、家康の四男松平忠吉を大将とし井伊直政、本多忠勝が付けられた徳川軍の先遣隊はまだ清須城には到着しておらず、翌20日、この到着を待って改めて軍議が開かれました。この場で、木曽川の川上の河田から攻め込む池田輝政ら約2万1000人と、川下の萩原・起から攻める福島正則ら約1万6000人の軍勢が配され、また犬山城の押さえとして中村一忠が置かれたと推測されます。

一隊の中心は池田輝政であり、以下浅野幸長・山内一豊・池田長吉・有馬豊氏・堀尾忠氏・一柳直盛ら主に東海道筋の諸将が付けられています。池田家は織田・豊臣家と親密な関係でしたが、輝政は家康の娘（次女督姫）婿として、徳川家とも近い関係であり、家康の厚い信頼を得ていました。

もう一隊の中心は福島正則で、以下加藤嘉明・細川忠興・黒田長政・藤堂高虎・生駒一正ら主として西国筋の諸将が付けられました。中でも黒田長政・藤堂高虎といった家康に近い武将に加え、軍目付として井伊直政、本多忠勝が付けられており、正則の動静に対する家康の深い配慮をうかがうことができます。

以降、美濃での戦いは東軍内部での池田輝政・福島正則両者の対立をはらみながら、幕を切ることとなります。22日、池田を中心とする諸隊は河田を経て、米野・新加納の戦い、福島を中心とする諸隊は竹ヶ鼻城での戦いにそれぞれ勝利を収め、23日の岐阜城の戦いを迎えることになりました。

一方、東西両勢力の間で対応に苦慮した岐阜中納言織田秀信は、結局西軍に与したため、美濃の諸将の大半は西軍として、大垣城、竹ヶ鼻城、岐阜城、犬山城を結ぶ木曽川での防衛線を張ることとなります。

岐阜城主織田秀信

秀信は天正8年（一五八〇）、美濃・尾張を領国とした岐阜城主織田信忠の嫡男として岐阜で誕生しています（資料2）。母は塩川長満の息女・徳寿院ともいわれます。文禄元年（一五九二）、織田家にとっても久々の岐阜城主（13万石）に封じられ、翌年には従三位中納言に任官。秀信に対する豊臣政権の厚遇ぶりが理解できます。

慶長5年（一六〇〇）、西軍に与し尾張への展開も画策した秀信でしたが、岐阜城の戦いであえなく敗北、池田輝政らの助命により上加納浄泉坊（円徳寺）に入って剃髪します。その後尾張知多郡を経由して高野山に送られましたが、落城の際に家来に宛てた感状が伝えられており、その人柄をしのぶことができます。秀信はその後、慶長10年5月8日、25歳の若さで没し、これによって信長・信忠に繋がる織田家の嫡流は断絶することになります。

（山田 昭彦）

資料2 織田秀信像（円徳寺蔵 / 岐阜市歴史博物館寄託）

米野・新加納の戦い

8月21日、清須を出発した東軍池田輝政が率いる軍勢は、河田で木曽川を渡河しての岐阜城攻略を目指していました。池田軍には一柳直盛、山内一豊、浅野幸長、堀尾忠氏らが属し、総勢2万1300人です。

対する西軍は、織田秀信配下の百々綱家、木造長政、飯沼長資らが、池田軍の渡河を防ぐべく、約2000人の軍勢で米野や「新加納」の砦に布陣しました。合戦に備えて西軍によって築かれた新加納砦は、現在の那加新加納町の台地上にあったと思われます。秀信自身は、川手村閻魔堂（現岐阜市）に布陣しました（資料3）。

8月22日、池田軍が河田で木曽川を渡り、川岸の米野で待ち構える西軍に攻め込みます（図2）。一柳直盛が先鋒となって渡河攻撃を仕掛けましたが、家臣大塚権大夫が西軍飯沼長資に討ち取られるなど、大きな被害を出しました。一柳隊に次いで池田家の軍勢が渡河攻撃を仕掛け、輝政の弟長吉が、飯沼長資を討ち取りました。

木曽川を渡った池田軍は、池田家老伊木忠次を先鋒に新加納川を越え、西軍が守る新加納砦に攻め込みます。西軍は砦を守り切れず岐阜城へ向けて退却し、閻魔堂の織田秀信も退却しました。池田軍は逃げる西軍に追い討ちをかけ、岐阜の町際まで攻め込み、約500人を討ち取りました。

この8月22日の池田軍と西軍との戦いは、一般に「米野の戦い」として知られていますが、一柳家が活躍した戦場である「米野」、池田家が活躍した戦場である「新加納」の両方を主戦場ととらえ、「米野・新加納の戦い」と呼ぶのが適当と考えます。

（長谷 健生）

資料3 布陣する織田秀信
（『関ケ原合戦絵巻』国立国会図書館デジタルコレクションより）

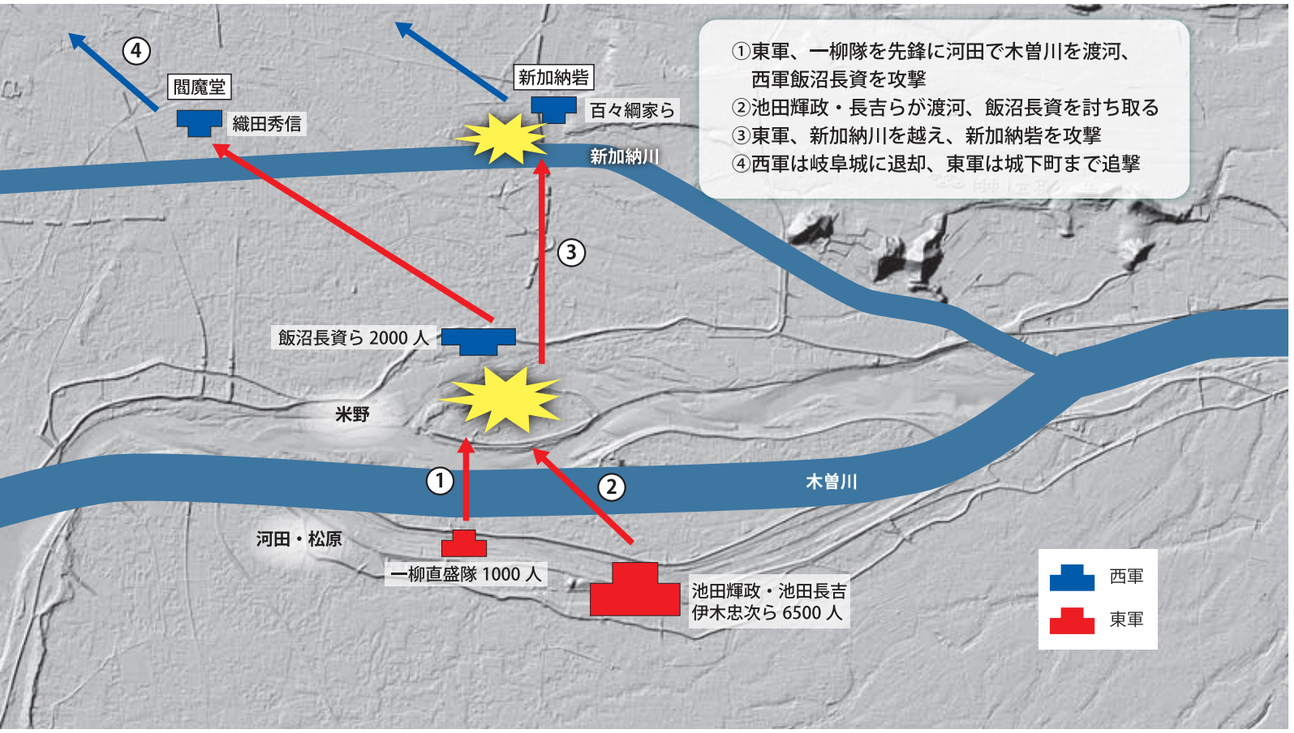


図2「米野・新加納の戦い」合戦の経過（地理院地図の陰影起伏図に加筆して作成）

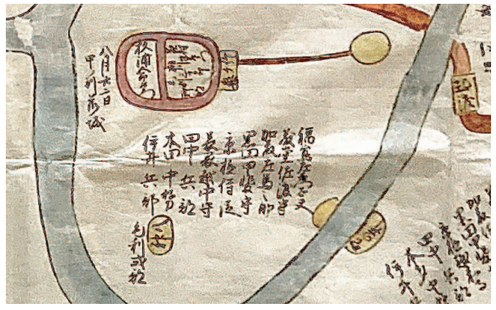
竹ヶ鼻城の戦い

8月21日、清須城から出陣した福島正則を中心とする1万6000の東軍は、起の渡しに向かいました。それに対し、木曽川の対岸では西軍に味方する竹ヶ鼻城主・杉浦五左衛門重勝と、織田秀信が援軍として派遣した梶川三十郎、花村半左衛門利之、毛利掃部広盛らの500余の軍勢が柵を構えて布陣しました。西軍が銃撃してくるため、東軍は下流の加賀野井に移動して、舟を集めます。

翌22日、正則は同時侵攻するはずだった上流の池田輝政の軍勢が独断で渡河を開始したのを知り、木曽川を渡り西軍の背後を襲います。西軍は急ぎ城へ戻ろうとしますが正則養子・正之の追撃を受け、多くの死者を出しました。東軍が城を包囲して降伏勧告を行うと、二ノ丸にいた杉浦重勝以外の武将たちはこれに応じて開門し投降。本丸の重勝は付き従う僅かな城兵と共に徹底抗戦し、自ら大槍を振るって半日の間戦い抜きましたが、最後は城に火を放ち自刃して果てます。竹ヶ鼻城は城割によって姿を消し、田畑となりました。

竹ヶ鼻城の位置に関しては明確な遺構が残されておらず、複数の説が唱えられてきました。現在、城跡を示す石碑は羽島市歴史民俗資料館の前に置かれています。しかし近年の研究では、天正12年（一五八四）、小牧・長久手の戦いに際しての羽柴秀吉による水攻めに関する複数の古記録を元に、現在の竹鼻別院西側の一帯が城址中心部であったと推測されています（資料4・図3）。江戸時代、竹鼻別院の東側は「城町」と呼ばれました。付近には「的場」などの地名も残っています。

（奥村 和磨）



資料4「関ヶ原合戦図」に描かれた竹ヶ鼻城
（羽島市歴史民俗資料館画像提供）

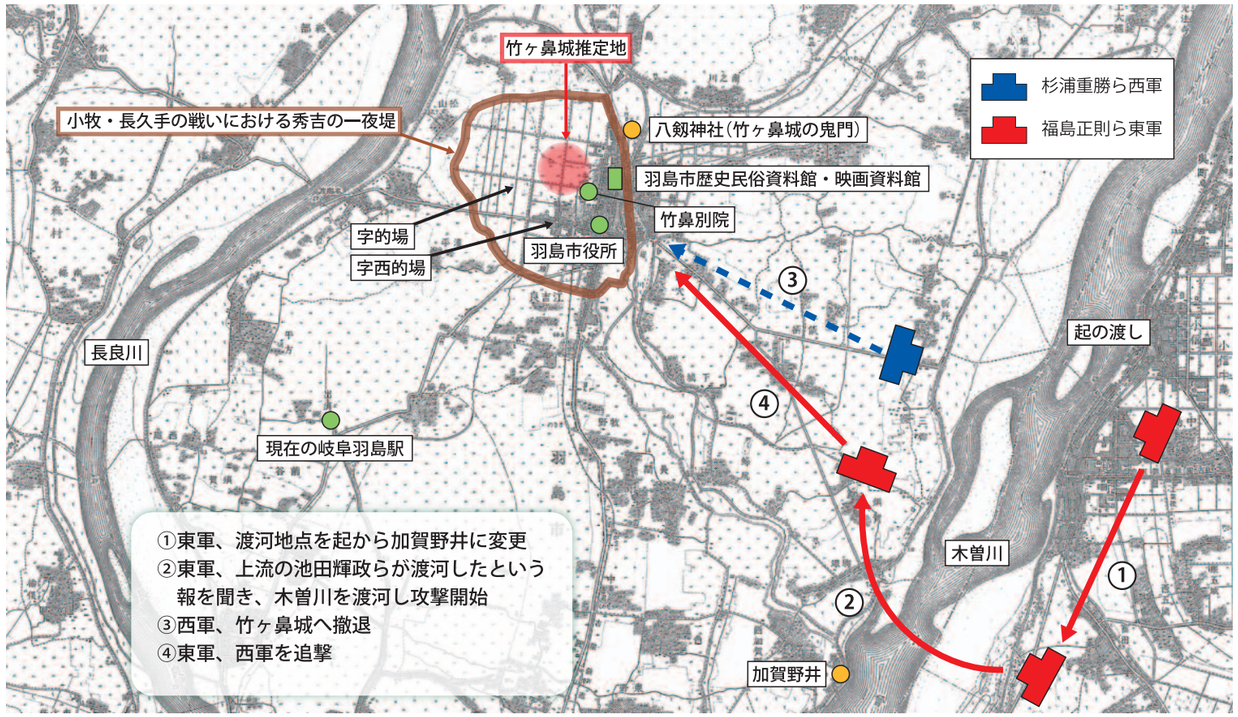


図3「竹ヶ鼻城の戦い」合戦の経過と竹ヶ鼻城の推定地（昭和25年 地理院地図に加筆）

岐阜城の戦い

8月23日の早朝、東軍は織田秀信の守る岐阜城攻めを開始します。岐阜城の南防衛ラインの砦「瑞龍寺のつぶら」を浅野幸長らが、城下町を囲む堀と土塁からなる総構の西口と矢島町口を福島正則らが、東の荒神洞達目口からは京極高知らが攻め込みます（図4）。通説では北の水の手口からは池田輝政らが攻め込んだとされますが、合戦に近い時代の記録にはそのような記述が見当たらないため、慎重な扱いが必要です。

「瑞龍寺のつぶら」は今の瑞龍寺山でなく、その北側の金華山ドライブウェーに沿って尾根線上に城郭遺構が残る場所で、城下町の総構と一連の防衛ラインです。この場所からは大手七曲の登城路を見下ろすことができます。石田三成もこの場所の重要性を熟知していたらしく、重臣柏原彦右衛門らを派遣して守らせるも大敗を喫します。

総構を突破した福島正則らは法華寺口大門を破って大手の七曲口から攻め上り、「日野岡峠」を経て本丸を目指します（写真1）。この大手七曲道の途中にあった「武藤つぶら」の砦は西軍木造長政らが守っていましたが、東軍との間で激戦が繰り広げられます。木造らは東軍を何度も押し戻す活躍をしますが、衆寡敵せず、本丸への撤退を余儀なくされます。

「武藤つぶら」の場所については、現在の展望レストランの位置（太鼓櫓）という説もあります。大手筋の要衝「武藤つぶら」を突破した福島正則らは搦手筋から攻め上った京極高知らと合流して本丸を目指します。

池田輝政家臣那須半兵衛の家譜には、本丸大手門での戦闘が記録されています。半兵衛ら4人は門の脇の塀に取り付いて攻略を目指しますが、1人は鉄砲にあたり討死し、1

写真1　西から見た岐阜城（岐阜市提供）

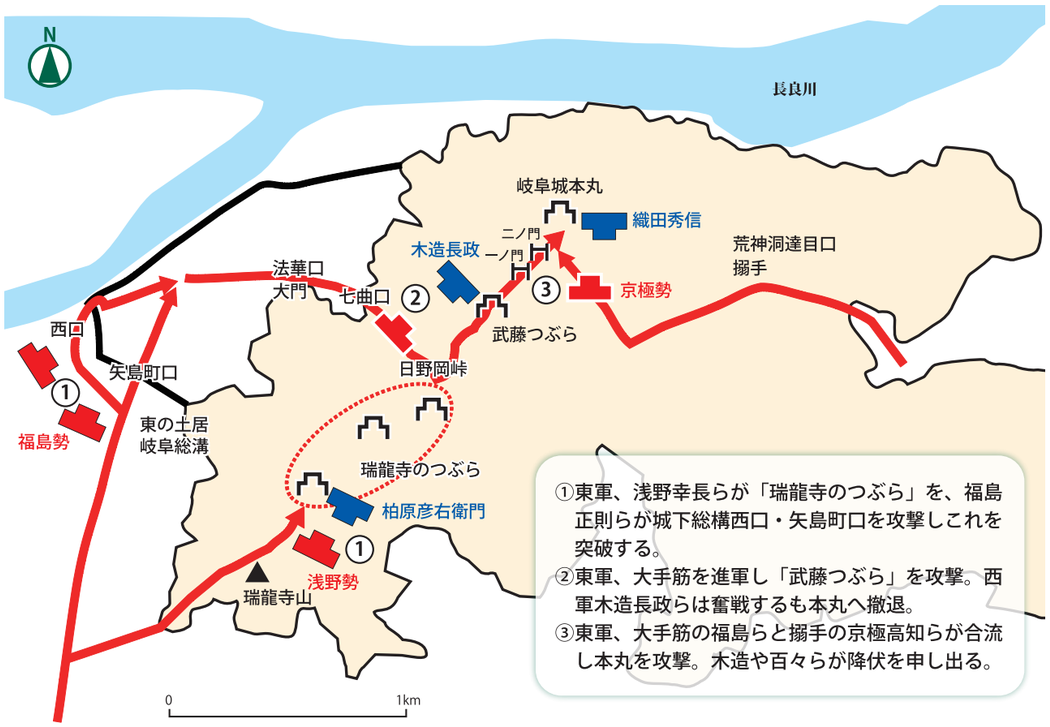


図4「岐阜城の戦い」合戦の経過

人は傷を負います。この大手門は現在の一ノ門という説もありますが、記述内容などから二ノ門の場所だろうと考えています。二ノ門直下の発掘調査では、岐阜城の戦いに使用された可能性が高い鉄製矢じりが出土しています。

大手門を突破すると本丸に至ります。本丸には天守や秀信の御殿があり、東軍が取り囲んだところ、秀信重臣の木造長政や百々綱家が秀信の助命を条件に降伏を申し出ました。

これまで天守と秀信御殿は同じ建物と考えていましたが、令和5年度の発掘で天守南通路上に庭が存在した可能性が高まったことから、二ノ門から天守に至る空間全体が本丸すなわち秀信居館であり、その中に天守・御殿・庭が存在したとみられます。

なお、岐阜城が攻められた際には西軍の籠る犬山城と大垣城からの援軍が予定されていましたが、前者は籠城する黒野城主加藤貞泰（かとうさだやす）らの東軍内応や「国中一揆」による「往来不成」のため、後者は河渡の戦いに敗れたため、いずれも実現できませんでした。

（内堀信雄）

岐阜城（岐阜市提供）

令和6年度 各務原市歴史民俗資料館
関ヶ原の戦い前哨戦シンポジウム

慶長五年八月の美濃

筆者紹介
山田昭彦・岐阜県博物館
長谷健生・各務原市歴史民俗資料館
奥村和磨・羽島市郷土史家
内堀信雄・岐阜市文化財保護課

開催日 令和6年8月24日（土）
会　場 各務原市産業文化センター 1階あすかホール
主　催 各務原市教育委員会

発行 各務原市教育委員会
編集 各務原市歴史民俗資料館 〒504-0911 岐阜県各務原市那加門前町3丁目1番地3 市立中央図書館3階 TEL 058-383-1361